

次の1000年もワクワクするためのSDGs情報メディア

— ツムギノ —

# TSUMUGINO

<https://tsumugino.life>



メールマガジンにご登録ください!

ツムギノのメールマガジンでは、もともと京都にある持続可能なエッセンスや、京都で新しく始まっている様々なSDGs情報をお届けしています。あなたらしいSDGsの「はじめかた」や「つづけた」を教えてください。そのアイデアが、みんなの未来を変えるかもしれません。その他、ワークショップやオンラインイベントなどの情報もお届けいたします。

TSUMUGINO Vol.5 / 2023年3月発行  
発行: 株式会社リーフ・パブリケーションズ (京都府京都市中京区烏丸三条上ル場之町592 メディナ烏丸御池4F TEL.075-255-7263)  
発行人: 高野和也 / 編集人: 上山賢司、編集アドバイザー: 加藤純子 / 編集: 和泉汐里、大石いずみ / 編集協力: 堀家秀太 / デザイン: 西堀裕美 / デザイン監修: 観音寺豊一  
マップデザイン: 濱口真一 / 印刷: 株式会社スイッチティフ

TAKE FREE

※本誌に記載の情報は2023年3月現在のものです。それ以降に情報の変更がある場合にはご了承ください。※表示価格は特に断りのあるもの以外、税込価格です。  
※新型コロナウイルス(COVID-19)を含む感染症の感染防止対策として、掲載している情報に変更が発生する場合があります。お出かけ前に掲載先の公式サイトやSNSなどで最新の情報をご確認ください。※本誌掲載の写真・イラスト・地図及び記事の無断転載を禁じます。



TSUMUGINO



THE SIGN FOR THE NEXT 1000 YEARS by Leaf

# THE SATISFACTION IS WITH YOU

手とへらだけで成形する手捏ねという技法や、小さな窯でひとつずつ焼く手法は、450年前と全く同じ。千利休から樂家初代の長次郎が依頼を受け、侘び茶の道具として生まれた樂茶碗は、今も茶人や美術家が羨望の眼差しを向ける孤高のお茶碗です。そんな器を作ってきた16代樂吉左衛門さんは、朗らかな笑い声で緊張感を和ませてくださる、世にも“自然体”な方でした。

PHOTO 森 昭人 TEXT 立原 里穂



ご自身の作品「赤樂茶碗」

豊かさはすぐそばに

豊かに生きる人は、自分のことをよく知り

しっかりとした自分のスタイルやヴィジョンを持っている。

だから他の人と比べることも競うこともない。

本当の自分との乖離なく

自分の魂で自分の体を生きていければ

幸福度も、満足度も高い。

そんな人たちが、今、何に気づき、何を思い、どう生きるのか。

お話をお聞きし、迷える私たちのヒントを教えてください。

## 土そのものの“赤”と、 陰影に溶け込む“黒”

— 初代の長次郎さんから数えて約450年。これまでの歴代当主が現代までつないできた樂焼について、教えてください。

樂焼が生まれたのは安土桃山時代、織田信長と豊臣秀吉が生きていたことから織豊時代と呼ばれることもあります。そんな時代に生まれた、村田珠光や武野紹鷗らが発展させ、千利休が大成させた侘び茶。それまで日本の茶道では中国や高麗のお茶碗が中心でしたので、利休がめざす侘び茶に必要な日本のお茶碗を、自ら生み出す必要がありました。初代の長次郎と利休さんが出会い、試行錯誤しながら利休さんが思う侘び茶のお茶碗を作り出したのが樂焼の始まりです。

— 樂焼といえば、黒樂茶碗と赤樂茶碗が有名ですね。

先に生まれたのは赤樂茶碗です。今でこそ“赤”と形容されていますが、長次郎の赤樂茶碗は茶室の差し色として赤色にしたかったのではなく、鉄分を多く含む聚楽第の赤土と透明釉を使っていたから、土色に発色しただけのこと。土そのものの存在を利休さんは引き出したかったのだと思います。その後、お茶碗を形容するために赤という言葉が使われ、赤樂茶碗と呼ばれるようになりました。それから利休さんと長次郎は、赤という色すらも排除した黒樂茶碗に挑みます。利休さんの茶室は小さいものなので、自然の光がスッと差し込むと明るくなったり、雲がかかると暗くなったり。自然に委ね、あるがままの茶室の陰影に溶け込むような黒いお茶碗を望まれたんだと思います。



十六代 樂吉左衛門

じゅうろくだい らくきちざえもん

1981年、十五代樂吉左衛門(現・直入)の長男、篤人(あつんど)として誕生。東京造形大学卒、京都市伝統産業技術者研修・陶磁器コース修了後に、イギリス留学。2011年には樂家に戻り、2019年に十六代を襲名



初代 長次郎 黒樂茶碗  
銘 面影 / 4月28日から  
開催される展覧会「ちゃ  
わんやのともし火」でも  
出展予定



十五代 直入 焼真茶碗  
銘 山鬼 1996年制作



INTERVIEW

## THE SATISFACTION IS WITH YOU

豊かさはすぐそばに



【楽美術館】の北側に位置する、茶室を有する母屋の前にかけられた【楽焼御ちawan屋】の文字は本阿弥光悦の筆によるもの。代が変わるたび新しいものに掛け替えるのだそう



— 利休さんと長次郎さんが表現したかったのは、黒や赤という色ではなく、土と光。いわば自然の素材や現象そのものだったのですね。いけばなをする方が植物から命を感じるように、楽さんも土からエネルギーを感じることがあるのですか。

今、主に使っているのは奈良の薬師寺の東塔を解体修理する際に、掘り出された創建当初の土を「これは良い土だ」と父親が絶賛し、譲り受けたものです。同じような成分、同じような粗さであっても、それぞれ「土の個性」というものがあります。土に触れるとき、頭の中でこうしようと考えらるというより、土のエネルギーに自分を“委ねる”という感覚があります。没頭していくうち、土と自分が混ざっていくというような、そんな気持ちに。こうしようという作為を手放し委ねる感覚がないと、手に馴染まずどこかに無理があるお茶碗になります。自然に手を加えることはできて、人間がコントロールすることなど到底できない。茶室から見えるお庭も自然の一部ではありますが、コントロールするというより、本来持っている美しさを尊重して手を加えていきます。抗わず、受け入れると生まれる真・善・美があります。そして、エネルギーといえば、窯です。僕は茶

碗そのものというより、楽家特有の窯が好きで家に戻ったところがあります。うちの窯は炎がブワッと舞い上がる、子どもの頃に見たキャンプファイヤー寄りなイメージで(笑)。窯焚きする際は、お手伝いに13人ほど集まってくさるのですが、楽家と色々なご縁で繋がった方々が楽焼を支えてくださっています。作陶は自分ひとりで行う孤独な仕事なんですけど、窯焚きはみんなの力を結集させないとできません。むき出しの窯ですので、温度が下がらないよう呼吸を揃え、メンバーがひとつのお茶碗に向かってエネルギーを注ぎ、楽家の窯に力をくださる。一碗に向けて炎が燃え上がる瞬間はすごく幻想的です。でもなぜか、お茶室でお茶を介して心を通わせる感覚とも近い。何か深いところでつながるような感覚です。

### 楽として生きること

— 手の中に土という自然を感じ、数多の傑作を生み出してきた楽焼。その伝統を継承することにプレッシャーはありましたか。

楽家の当主は代々、「教えないこと」を教わるのが家訓です。手取り足取りして杵をつくると、

その杵の中でしか動けなくなりがちです。杵が無くとも杵に囚われる事もあります。例えば作陶を続けると、慣れてへら使いがうまくなります。小慣れたものを短時間で何個も作れるようになる訳ですが、これはこれで型にはまっています。自分で杵をつくり、壊し、再構築する。そして少しずつ自分の杵を大きくしていく。歴代当主の茶碗を基盤としながらも、決して模して作るのではなく、歴代の当主がそれぞれに侘び茶を捉えながら何を生み出していかのか、問い続けることが重要です。実はプレッシャーという言葉が、私はあまり好きではなくて。それぞれの人生に、それぞれのプレッシャーがあり、そのプレッシャーはその人にしかわからないものだと思うのです。私にはもちろん背負うものもありますけれど、歴代が使ってきた窯場と仕事場があり、歴代の作品が残した足跡があり、それを感じながら歩んでいくのは楽しめもあります。楽茶碗は、私を含めこれまでの16人の目線と表現がある訳ですが「私はこの代が好き」とか「このお茶碗がええなあ」など【楽美術館】での鑑賞をきっかけに、楽茶碗のファンになってくださる方もいらしてありがたいです。

— 【楽美術館】での鑑賞も楽しいものですが、お茶室の中で見るお茶碗はまた印象が違いますね。

このお茶室には照明の明かりが一切ないんです。ないことによって、外からの光がすごくきれいに見え、太陽や雲が動くことで空間の陰影が変わり、お茶碗の表情も刻々と動いていきます。暗いからといって人工の光を取り入れてしまうと、自然の陰影を拒絶してしまうことになるんですよ。この茶室にとって、ものがよく見えることはさほど大切なことではありません。見えすぎて感じづらくなることの方が多いんです。現代社会もそうかもしれません。杵に囚われないように、文明の力に囚われないように、本質を見えなくしてしまうモノをなるべく無くす。茶の湯や茶室という美学にはそのような仕組みもあるのかもしれない。

### “整う”と流れ出す豊かな日々

— ついつい便利な照明をつけてしまいますよね。でもそれでは、自然の美しい光を捨て去ることになるとは盲点でした。人はつい目的と手段を入れ替えてしまいます。豊かに生きるためのSDGsなのに、気づけばSDGsのために生きなければならぬなんて思考に…。楽さんの豊かさはどんな所にありますか？

2019年に楽吉左衛門を襲名した時、披露のパーティなどはせず、お伝えしたい方々を少人数で何日にも分けて、楽家へお招きし、茶道の本質的な姿であるお茶事でもって襲名披露としたんです。効率的に多勢の方にお会いするのはなく、心の交流ができる少数での茶事が好きで、そして自分に必要な時間だと考えました。そのおもてなしの準備のひとつに庭の掃除がありまして。プロペラみたいな形をした紅葉の種を父とせつせと拾う作業を毎日していました。「庭がきれいになることで、お客様の気持ちが整うように」と、父と一緒に掃除しているうち、自分の気持ちも整っていく。そんな時間が割と好きで、今思うとそれは豊かな時間だったのかもかもしれません。父に対抗心や変なプレッシャーを感じていたら、庭掃除を豊かだとは思えません。もてなしたい人がいて、一緒にもてなしてくれる人がいて、そのためにたくさんの方々の支えがあって、感謝リスペクトしている状態。それらが整っている状態は豊かと言えます。実は大学卒業後に行ったイタリアでお世話になった彫刻家の方がいるのですが、その方に聞くと、その当時は「跡は継ぎません！」って血眼で言っていたみたいなんです。肩に力が入り意識が対峙していたんだと思います(笑)。そこから時間が経ち、徐々に家業の事を思い描き、様々な事が整った。家族が居て、好きな茶事ができる。それで十分豊かです。

**楽歴代 特別展**  
**「ちゃわんやのともし火」**

**2023年4月28日(金)～8月27日(日)**

一般1,100円 / 大学生900円 /  
高校生500円 / 中学生以下無料

始まりから約四百五十年、令和の時代へと受け継がれる楽歴代の茶碗や実際の窯の炎の映像などから楽焼がもつ精神性を探る展覧会となっています。

**楽美術館**  
〒075-414-0304  
京都市上京区油小路通一条下ル  
10:00～16:30(入館は16:00まで)  
月曜休(祝日の場合は開館)  
<https://www.raku-yaki.or.jp/>

# Methods of Happier

世界舞台での経験で得た  
豊かになるためのいくつかのこと

『失ったものを数えるな、残されたものを最大限に活かせ』—パラリンピックの父と呼ばれる人の言葉だそうです。競技人生の最後にやっとそのことが理解できたと話してくれるのは、2016年リオパラリンピック水泳で8種目に出場し、2021年10月で現役引退したばかりの一ノ瀬メイさん。社会がつけている“生きにくさ=障害”をひとつひとつ無くすために活動を続けておられます。

## “無いものをねだらない”

「すべてを犠牲にして勝ち取った世界舞台で、決勝に残らなかった…。達成感をまったく感じられなかったんです。帰国して父親に話すと、それでは“一生幸せになれない”と言われたんです。もし決勝に残れたとしても、それならメダルが欲しかった!もし銅メダルを取れたとしても、銀メダルが欲しかった!って…エンドレス。それを聞いて、無いものをねだるより、今あるものに感謝しようとマインドが生まれました。だって10年もかけて念願の舞台に立ったのに、嬉しいって思えないなんてもったいない」。

世界舞台の大歓声の中、彼女が感じたスタート台の前後での貴重な体験。そこまで大きな舞台でなくとも、多かれ少なかれ私達にも身に覚えがあるのではないのでしょうか。良い大学を卒業して、良い企業に就職しなければならない。体型はスリムで…。自分の生きたい道や、価値の尺度とは違う「社会のノイズ」にかき乱され、自分の魂で自分の体を生きることは案外難しくなっているのかもしれない。彼女はこうも言います。「ぼーっと生きてると、他人(社会)に幸せを作り上げられちゃうんです。経済社会につくられた世間的な幸せって、あるじゃないですか。引退をもったいない!という反応もそのひとつと言えます。だから自分と向き合なきゃ。自分へのジャッジを他人にもしてしまっている。自分を許した分だけ、相手も許せるし、自分を理解できた深さの分だけ、他の人も理解できる」。パラリンピック出場当時は、金メダルを獲ること以外では幸せになれないと思っていた彼女ですが、今は小さな出来ごとにも感謝し、今日、自分がしたいことに素直に着目でき、個人としての幸せを見直せるようになったそうです。足るを知り、自分を認め、信じる。引退からまだ1年ちょっと、豊かに生きるためのセラピー術について、まだまだ実験中とのことでしたが、彼女が言葉にしてくれた現時点の考え方は、きっと豊かに生きるための重要なコンセプトではないのでしょうか。

COYOTE the ordinary shop  
 京都タワー・近鉄  
 キャンパスプラザ京都  
 近鉄京都駅  
 八条通 JR京都駅  
 ・イオンモール

〈撮影協力〉COYOTE the ordinary shop  
 京都市下京区東塩小路町939  
 キャンパスプラザ京都1階  
 ☎075-353-9154  
 7:00~19:00  
 月曜休(祝日の場合は営業)  
<https://coyote-coffee.jp>

# 一ノ瀬メイ



## “自分を信じる”

「リオのスタート台に立ったとき、結局1人なんだと感じました。勝利を掴みとるのも、責任をとるのも全て自分。なのに外の世界ばかり気にして…。メディアや周りからの期待を通して映る“もうひとりの自分”との乖離が、激しい焦りとなって渦巻いていました。もっと自分に目を向けないと、いつか空っぽになる—そう感じた瞬間でした。私の場合はその後“内省の時間”を大切にして、徐々に乖離を縮めていきました。自分と向き合い、自分を理解し、自分を許し、信じる。そうすることで肩書きが無くても自分でいられる。その一連のセラピーとも言える時間によって、引退への決心がついたような気がします。水泳を手放した自分には何も残らないのではないかという不安はいつしか小さくなっていました。まだ今でも日本記録をひとつも破られていないので、まわりからはもったいない!という反応一色でしたけどね」。



PHOTO 橋本 正樹 TEXT 上山 賢司

# Eternity ∞ Blue

みなさんは藍という植物をご存知でしょうか? 大原野の地に小さな種を蒔き、伝統的な栽培方法で育てた藍を染料に。晴れ渡る空のようなジャパンプルーに染めていく、京藍染師の松崎陸さん。「命の色で命をつつむ」をブランドコンセプトにしたその真意とは?

PHOTO 森 昭人 TEXT 立原 里穂



松崎 陸  
Riku Matsuzaki

京都・大原野出身。大学卒業後に訪れたニューヨークで藍染のジャパンプルーを知り、帰国後に愛媛県「野村シルク博物館」で2年の修業を経験。[染司 よしおか]5代目当主・吉岡幸雄先生に師事。独立して大原野で活動中

京藍染色工房  
 (OHARANO STUDIO GALLERY)  
 京都市西京区大原野春日町544-26  
 ☎080-1463-1186  
<https://matsuzakiriku.com/>  
 活動拠点としているのは、シェアアトリエ。韓国人アーティストのベ・サンソンさんや、イギリス人アーティストのマイケル・ウィッテルさんら仲間と共に、制作活動を行なっている



藍染に魅せられた話

## 口から飲むだけでなく 身にまとうことで得られる力

薬を飲むことを“服用”“内服”と言いますよね。江戸時代の文献をひもとくと、薬効のある植物で衣服を染め、心身の健康を維持していたことが記されているとか。皮膚が一番お大きな臓器であるとの見方もあるそうです。「現代でもブルーは男性の色という印象がありますが、藍染された布には抗菌・防臭効果があると言われるトリプタンスリンという成分が含まれていることが科学的にわかっており、男性の体臭を消していた名残りではないか。ピンクに染まる紅花は血液の流れを促進し体をあたためるので、女性がよく身につけていたのではないかと、僕は推測しています」。性別で色を決めつけていたのではなく、科学の無い大昔に、昔の人はそういった色が持つパワーを感じていたのかもしれない。

## ポロポロと土に還る 循環の感覚

自然豊かな大原野に工房を構え、今でこそ藍染を専門に行う松崎さんだが、[染司 よしおか]に弟子入り当初は、なかなか藍に触れる機会を得られなかったそう。藍の染液づくりは特別なものだから。藍は他の染料と違い、発酵させないと色が出てこない。もし発酵が止まると仕事が止まる事に。「とはいえ、早く藍に触れたくて。自宅の風呂場やベランダで藍を仕込んで学んでいたんです。その際、隣人に迷惑がかからないよう、排水路の流れ道に藍染の手拭いを詰めていたんですが、1年半ほどして取り出すと、まるで土のようにポロポロと崩れ落ちて。植物で染めた植物の繊維はこうして土に還っていく、と改めて体感したんです。微生物の分解力、死しておお意味があるように思える循環の感覚に目覚めた瞬間です。逆に土に還らないものが異質なんだなと思いました」。

漠然とした自然への敬意が、土から始まり土へと還るものづくりがしたいという確固たる信念に。さらに「歴史の中に答えがある」という師・吉岡氏からの言葉を支えに、扱う材料も削ぎ落とし、昔へと戻っていった松崎さん。「短時間で、大量に、低いコストで染められるからといって化学薬品には何かの違和感を感じていて。室町時代に使われていたであろう木灰と薬を一緒に使ったところ、発色もよく色移りもしない京藍染になりました」。自家栽培する藍の畑には、同じ大原野のそば専門店「そば切り ころろ」さんから預かった出汁がらを肥料として使用。自然と共に生きた古の日本人がしてきたように、自然の循環サイクルに沿って生み出されるジャパンプルーは、纏う人の心に調和をもたらしてくれるはずです。

# SOCIAL GOOD SHOPPING

## 今日からできるエシカルショッピング

毎日の炊事洗濯でつかうもの、口にするもの、身につけるもの。日常を支える“もの”たちを、エシカルな目線で選んでみませんか？ 小さな選択の連続が、あなたの毎日を少しずつ豊かにするかも。

PHOTO：菊池 佳那 TEXT：藤田 えり子

※表示価格は特に断りのあるもの以外、税込価格です。  
 ※新型コロナウイルス(COVID-19)を含む感染症の感染防止対策として、掲載している情報に変更が発生する場合があります。お出かけ前に掲載先の公式サイトやSNSなどで最新の情報を確認いただくようお願いいたします。



1 麴米、掛米とも岡山産の有機米「雄町」を使用。雄町特有のやわらかな旨みが広がる。有機 純米吟醸 GREEN 雄町(720ml)2,178円



2 天然の界面活性剤でケミカルフリーを実現。マスターミネラル(300ml)3,850円。計量目盛付スプレーボトル付き



3 Mサイズ S/Mセット M Sサイズ

オーストラリアのサンシャインコーストでデザイナー一家が手作り。ビーエコラップスタンダードS902円、M1,452円、L2,112円、XL2,772円



4 月齢ごとに大きさを調節して食べやすく、アレルギー対応、放射線量検査済み、manma 四季の離乳食490~510円



5 再生ポリエステル製 オックスフォード風生地を使用。タウンユースでもおしゃれなデザイン。撥水や防シワ効果があり、ストレッチ性を持たせた高機能の素材で手入れがしやすいのも特徴。ケルベロスジョガーパンツ13,750円



6 胸元の複雑なシャーリングがポイント。オーガニックコットンのカディは肌あたり抜群。シャーリングブラウス44,000円



7 上から、3つ折りミニ財布16,280円、2つ折り財布16,280円、シンプル名刺入れ8,690円(いずれもエンボスレザー)。オプションでギフト対応も可

## 1 玉乃光酒造の「有機 純米吟醸 GREEN 雄町」

「自然に寄り添う酒づくり」を目指してオーガニックの日本酒作りに挑む

有機農法で育てられた酒米「雄町」を100%使用した純米吟醸酒。オーガニック認証を取得し、注目を集めている。有機での酒米作りは特に難しいといわれているが、杜氏の熱意が契約農家を通じてチャレンジが実現。もともと純米酒にこだわりを持ち、かつては幻の酒米と言われた雄町復活の一端を担った玉乃光酒造の新たな試みだ。オーガニック日本酒GREENは「雄町」のほか「山田錦」も発売中。

オンラインストア <https://tamanohikari.sake.com/>

## 2 株式会社mastermineralsの「マスターミネラル」

生分解率99.9%。環境と肌にやさしい清浄剤 暮らしの洗剤はこれが一本あれば大丈夫

成分は塩湖の太古地層から採取した高濃度ミネラルと植物抽出物と水のみ。油污れに強いのでレンジフード掃除から食器洗い、洗濯、床やトイレ掃除まで幅広く使える。肌を守りながら汚れを落とすから、敏感肌の人でも安心だとか。また薄めてスプレーすれば除菌や殺菌、消臭にも効果がある。生活排水から出る汚染物質を微生物が分解できるまで細かくする能力、生分解率が極めて高く、環境に負荷をかけないのも大きなメリット。

公式HP <https://masterminerals.jp/>

## 3 Bee Eco Wraps Japan の「ビーエコラップ」

カラフルな柄がキッチンを明るくする 繰り返し使えてエコな布製ラップ

毎日なげなく使用して、使い捨ててしまう食品ラップ。ラップフィルムは一般にプラスチックに分類されるためマイクロプラスチック汚染の原因に、またウミガメなどの海洋生物の誤食も問題になっている。GOTS認証(※)を受けたオーガニックコットンなどに天然素材のワックスを浸透させたビーエコラップは洗って何度でも使え、ミソロウとホホバオイルの抗菌性が食品の鮮度を守ってくれる。小さな子どもの食べ物を含むものにも安心だ。

オンラインストア <https://www.beeecowraps.jp/>

※GOTS認証(Global Organic Textile Standard/オーガニック-テキスタイル世界基準)は「オーガニックコットン製品」であることを証明する認証制度

## 4 はたけのみかたの「manma 四季の離乳食」

赤ちゃんに食べさせられる 滋養果の旬の野菜を使ったベビーフード

忙しいお母さんの助けになる市販のベビーフード。お母さんの手作りと同じように愛情こめて作られる「manma 四季の離乳食」に使用しているのは、すべて顔の見える見える農家が育てた栽培期間中、化学合成農薬・化学肥料(窒素成分)不使用の野菜だ。「安心安全な野菜を作りたい滋養の農家と消費者をつなぐ」という想いから会社を立ち上げた。春はにんじんやかぶ、夏はトマトやとうもろこしなど旬の野菜を用い、余分な調味料は控えて野菜そのものの美味しさを生かしている。

オンラインストア <https://hatakenomikata.shop-pro.jp/>

## 6 A.Dupréの「ブラウス」

インド製手織り布が モダンなデザインの服に生まれ変わる

今でも人の手で糸車を回し紡いだ糸で手織りする、インドの木綿布「カディ」。糸が細くて撚りむらがあるため、柔らかく肌触りの心地よさは格別だ。エイ・デュプレが提案するのは、西ベンガル地方の素朴な手仕事とモダンでシックなデザインという相反する取り合わせ。大量生産にはない新たなものづくりの可能性をひらくとともに、服を購入することでインドの生産者には適正な報酬が支払われ、手仕事の伝統の継承にもつながってゆく。

<https://www.adupre.tokyo/>

## 5 BRING™の「ケルベロスジョガーパンツ」

「服から服をつくる®」新しい循環 不要になったポリエステルの服を再利用

世界のファッション産業から生まれるゴミは年間9200万トン。BRINGでは参加企業と共に、ハチのキャラクターが目印のボックスで古着を回収(一部店舗を除く)。回収した古着の中でもポリエステル100%の服は独自のリサイクル技術でポリエステル樹脂に再生し、再び服として生まれ変わらせるプロジェクトを展開している。再生した服は、アウトドアシーンでも活躍する機能とデザイン性を兼ね備えたアイテムが揃う。

オンラインストア <https://bring.org/collections/products>



BRING EBISU  
 ☎03-4400-1251  
 東京都渋谷区恵比寿西2-9-8  
 大澤ビル1F  
 12:00~19:00  
 日~火曜、祝日休

## 7 JOGGOの「革財布」

自由に配色をカスタマイズできるレザー小物 すべての人と環境にやさしい企業を目指す

財布やバッグ、スマホケースなどさまざまなアイテムには、元来破棄されてしまっていた食用牛の牛皮を活用。10~17色から選べて各パーツごとの選択が可能。パソコンやスマホの画面を見ながらのオーダーは簡単、名入れ刻印もできるのでギフトとしてもぴったりだ。バングラデシュに自社工場を持ち、現地の人が働きやすい環境を整えて貧困から抜け出せるよう支援をしている。国内工場では障がいをもつ人が職人として活躍し、またCO2を排出しない自然エネルギーで運営されている。

<https://joggo.jp>

# Kyoto Sustainable Tourism

京都では、1000年続いた理由があります。その根底に流れる「真・善・美」たる本質を見極める哲学を大切にしながらも、次の1000年を紡ぐための新しい取り組みがはじまっています。いよいよ文化庁も移転され、ますます京都の持つ意味が深みを増します。

今回も3つの違った切り口から、持続可能な観光についての取り組みや考え方ををご紹介します。

一つ目は、排気ガスゼロのクリーンモビリティとして期待される「E-バイク観光」。車でも徒歩でもないスピードは、美しい京都の自然を感じるのにちょうど良く、体力がある人も、ない人も一緒に楽しめるのが最大の魅力です。市内から少し遠いけれど魅力的な”とっておきの京都”へ誘ってくれます。

二つ目は、老舗和菓子店が考える、人生を楽しむためのボーダーライン。国を越え、大きな文化の違いを楽しむのが旅ですが、その旅をさらに楽しむには、地域に眠る深いボーダーを感じ、そこから醸成された地域が誇る文化を探ること。多文化を知る事で、自分のアイデンティティを知ることにもつながります。

三つ目は、障得(しょうがい)のある人やひきこもりの人などのアート活動支援の話。強いこだわりはきっと天才の証。純粹な気持ちが作り上げる感性と表現力は、見る人の心も豊かにします。2023年4月以降は、車前予約をすれば創作中のアトリエ見学が可能に。アート作品の購入も可能です。

次の1000年もワクワクしよう

旅 SPGS  
||  
Kyoto Sustainable Tourism



サステナブルな観光コンテンツにご使用いただけるロゴを作成いたしました ©DMO KYOTO

コンセプト文及びロゴ申請はこちらから

京都市観光協会(DMO KYOTO)では、未来の環境や社会への影響を考慮した観光スタイルを目指すコンセプト「Kyoto Sustainable Tourism」とそのロゴマークを作成しました。コンセプトにご賛同いただける方は右記QRからお申し込み下さい。ロゴマークをご利用いただけます。

次の1000年も京都が京都であり続けるために、ともに紡いで頂ける方を探しています。



## 01 | Kyoto Sustainable Tourism Report

### FIND THE HIDDEN VISTA

#### E-バイクでまだ見ぬ景色の中へ

新しいワクワクを見つけたい!という方におすすめしたいのがE-バイク。観光でのクリーン・モビリティとして注目されています。「自転車ではか行けない、とっておきの京都があります」と話してくれたのは、[サイクルベースあさひ 洛西口店]店長の林山さん。E-バイクに特化し、全国随一のラインナップを誇る店内には国内外の人気車種が並びます。



PHOTO 森 裕人 TEXT 立原 里穂

#### 欧米で支持されている 走りに特化した E-バイク

日本で電動アシスト自転車といえば、いわゆるママチャリと呼ばれる街乗りスタイルが主流。一方、欧米では走る楽しさに特化したE-バイクが支持を得ているそうです。E-バイクとは、ロードやクロスバイク、MTBなどのスポーツバイクに電動アシストユニットを搭載した「電動スポーツアシスト自転車」のこと。サイクリング初心者や体力に自信がなくても乗りこなすことができるE-バイクは、その快適性と共に地球に負荷をかけないクリーンな乗り物として、注目が集まっています。



[サイクルベースあさひ 洛西口店]店長・林山祐樹さん。愛好家から初心者まで、その人のレベルに合わせたトークで丁寧に接客してくれる。自転車の魅力は「景色がキレイな事に気づけるスピード」とのこと



サイクルベースあさひ 洛西口店  
☎075-382-2131  
京都市西京区川島六ノ坪町29-2  
10:00~19:00 土・日曜、祝日10:00~20:00  
8月19日、12月31日~1月2日、2月20日休  
<https://www.cb-asahi.co.jp/lp/store/rakusaiguchi/>

#### 体力の差をカバーして 皆でライドが楽しめる

「体力がある人も、ない人も一緒に楽しめるのが、E-バイクの最大の魅力です。ペダルもスムーズでアシスト力&パワーも格別。バッテリー容量も大きく、長い距離はもちろん、坂道や山道もなんのその。これまで行ったことのない竹林や茶畑、桜並木や紅葉のトンネルなど、憧れの景色の中へ。自転車でないとは出会えない美しい景色にきっと感動されると思います」と林山店長。スタイリッシュな最新モデルを見れば見るほど欲しくなってしまうE-バイクですが、価格の中心は30万円前後。すぐには決められないという人向けに、E-バイクで巡るサイクリングツアーを開催しています。定期的に行っているのは、竹林の中を駆け抜ける「洛西アドベンチャーライド」。京都人にとっても近くて遠い、大原野周辺の魅力を存分に知ることができます。ツアー当日はサイクリング経験が豊富なスタッフが同行してくれるほか、貸出し用のヘルメットはもちろん、無料の貴重品用のロッカーや更衣室も用意されているので、手ぶらで気軽に参加することが可能。女性同士や親子での参加も多いそう。そのほか、お花見サイクリングツアーやいちご狩りサイクリングツアーなど、“花”も“団子”も楽しめるツアーが満載です。

「洛西アドベンチャーライド」、「はじめてのロングライド」、「御朱印集めサイクルツアー」など様々なツアーを実施。ガイドなしで楽しみたい方には1dayレンタサイクルE-バイクも準備されている





人生を楽しむための  
ボーダーライン

## 02 | Kyoto Sustainable Tourism Report

# BORDER & IDENTITY

毎年4月1日から発売が始まる、京都人が愛するお菓子といえば[老松]の夏柑糖。夏みかんの中身を職人さんがひとつずつくり抜き、絞った果汁と寒天を合わせて冷やし固めた、おもたせに欠かせない春夏のお菓子です。いつまで店頭で並ぶかは、その年の収穫数によりけり。そんな自然に逆らわないお菓子作りを続け、便利さよりも豊かさを追求する、[老松]当主の太田達さんにその哲学を伺いました。

撮影協力 有斐斎弘道館 PHOTO 中尾写真事務所 TEXT 立原 里穂



取材当日の天気は小雪。掛け軸も当然ちなんだものが、取材陣のためにも心をつかってくたさる



窓際の景色をモダンに彩る赤い椿をいけた花器は、世界を舞台に活躍するシューズデザイナー・アーティストの串野真也さんの作品

太田 達  
Toru Ota

有職菓子御調進所 老松 当主、茶人、有斐斎弘道館 理事、立命館大学食マネジメント学部 教授、工学博士。専門は食文化、宴会論、伝統産業論など菓子文化研究意外にも多彩



カキツバタの形をした「唐衣」の菓銘は、伊勢物語の有名な和歌が由来。「から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ」の各句の頭文字をつなげたもの



撮影にご協力いただいた[有斐斎弘道館]の庭。元は江戸中期の儒者・皆川淇園が建設した学問所。2009年に起こったマンション建設のための取り壊しの危機から太田さんらが救い、現在まで保存・活用を続けている



魯山人の器を合わせた「花筏」もまた、春らしい菓銘。桜の花びらが川面に浮かび、流れていく様を表現している。散りゆく花びら愛でるといっても日本独特の感性

### 食を軸にした観光をバスクで体感

取材の前日まで、フランスとスペインにまたがるバスク地方を訪れていたという太田さん。独自の文化を育むバスクで感じたのは、そこに生きる人たちがアイデンティティをしっかりと持っている、ということだったそうです。

「食と観光が深く結びついていて、料理で博士号が取得できる大学(バスク・クリーナリー・センター)を有するバスクという都市にずっと関心がありまして。美食の街として知られ、スペイン側に位置するサン・セバスチャンにも立ち寄りまして。ヨーロッパ屈指の観光地でありながら耳にするのはスペイン語でも、フランス語でもなく、バスク語。滞在中、スペインの国旗もひとつも目にしなかったと思います。そのぐらい自分の地域に愛着を持っているんです。サン・セバスチャンには小さなバルが100軒ほどあり、ワインを片手にピンチョスと呼ばれる一口サイズの料理をいただきます。名物ピンチョスを食べながら一杯飲んだら、隣の店へとどんどん移動、そら楽しみに決まってるでしょ。そうやってハシゴしているうちに、ピンチョスって懐石の八寸みたいやなって。京都でもお酒一杯と一品のセットで日本料理の店を何軒もハシゴで

きたら楽しいやろな、世界中の人が喜ぶやろな、なんて想像しながら巡ってました」。楽しむという姿勢は太田さんの人生に欠かせないキーワードのようです。

### ビジネスに求めるボーダーライン

コロナ禍以前は、海外研修として社員の皆さんと毎年、未知なる土地を訪れていた太田さん。「行き先はミャンマーの奥地とかボルネオ島とか、みんなが普段は行かないような、でも気になる国を選んで。ホテルはハイクオリティなところをリザーブ。到着した日だけみんなで一緒に過ごし、あとは最後の日までフリーにしました。ハイクラスホテルの対応方法、サービスに触れること、現地での味の記憶が僕らのビジネスに役に立つと思ったから。でもまあ、研修で学んでもらうというより、一緒に遊んでいたという感覚ですけどね。会社ではなく、和菓子文化と一緒に楽しむコミュニティです」。会社の中に役職はなく、自身のこと代表や社長ではなく、「太田さん」と呼んでもらっているそう。そんなボーダーレスな経営者には、「ビジネスに求めるものは幸せ、決して金儲けではない」という明確なボーダーがあります。ここまでい

けば従業員もお客様も幸せになれるというラインを見極め、売上の上限も決めているのだそうです。「工房で働いている子はもちろん、本店にいる子も、デパートの売り場に立ってる子も、社員約45人と菓子が作れて、職人はほぼ全員一級技能士です。作れて、経理できて、売り場に立って、配達もできます。そんな有能な仲間である彼らが幸せで、楽しい人生を歩めれば、もうそれでいいわけです。便利は嫌いですが、正直言って。だから、工房を機械化することも、面積を広げて効率化や量産化を図ろうと考えたことは一切ありません」。

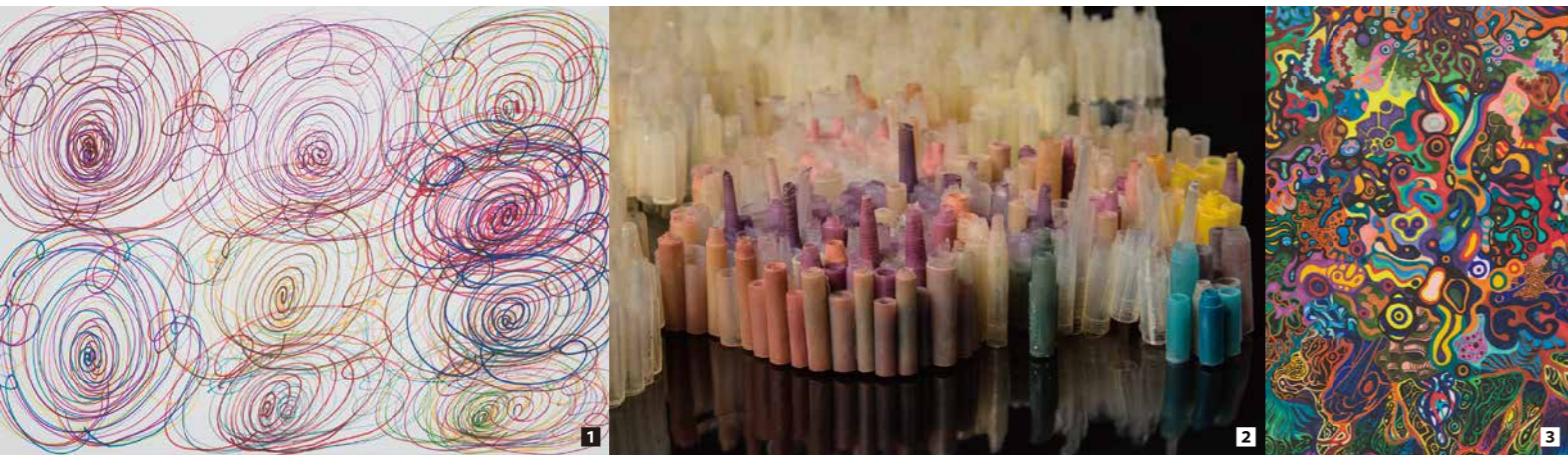
### もっとアイデンティティに焦点をあてた京都観光が必要

スマートフォンを持っていないけれど、自分が調べたい情報は、どの図書館のどの棚にあるかわかり、車のカーナビは使わないけれど、世界中どこに行ってもタクシーの運転手ができるほど地図が読めるという太田さん。私たちは文明の利器によって生き方まで進化したように思っているけれど、実は便利になったことで失ったものの方が多いのかもしれない。第六感を鈍らせることなく新しい世界に飛び込んで、

文化を革新していく太田さんの頭の中には、また新たな構想があるようです。「例えば、お茶やお能など伝統文化が色濃く残る上京区あたりと、商業と工業で栄えてきた下京区あたりは、やはりアイデンティティが違う気がします。行政区分ができたのは、長い京都の歴史の中で、案外新しい。これまでのように京都をひとくりに扱わず、もっとアイデンティティに寄ってコンテンツを掘り起こしてはどうか。そうする事でバスクのサン・セバスチャンのように、地域の誇りが輝き出す。地域にある素晴らしい文化を後世に残していくために、必要なことではないかと考えています」。国境を越えて交わり、地域を大切に。これからの観光のひとつのありかたを教わった気がします。



老松 北野店  
☎075-463-3050  
京都市上京区社家長屋町675-2  
9:00~17:00  
不定休 P無  
<https://oimatu.co.jp/>



1.足立茉莉「無題」 2.石原寛子「増殖」 3.若林義輝「無題」

## 03 | Kyoto Sustainable Tourism Report

# Everyone is a genius

なぜか「気になる」「吸い込まれる」。アーティストのフィルターを通して言葉では言い表せない魅力を生み、それをアートと呼ぶ。個性豊かなアーティスト達の活動を支援する「天才アートKYOTO」の活動をご紹介します。 PHOTO 森昭人 TEXT 立原里穂

### 才能あふれる人材が創作から離れないように

自分の中にはない個性に惹きつけられ、ついで目が離せなくなる。芸術作品を生み出すアーティストたちは、ありきたりな毎日に非日常というご褒美を与えてくれます。そんな秀作を世に送り出す「天才アートKYOTO」は、障がいのある人やひきこもりの人などが持っている優れた感性と表現力を支援する団体です。2011年に設立されてから、アトリエの提供、作品のアーカイブと複製画の販売、原画のレンタルや販売、展覧会の開催、グッズ販売など、多岐にわたってアーティストの活動を支えてきました。時おり、様々な機関・企業の協力を得て公共空間等で開催される展覧会から購入等の問い合わせなどもあるそう。個性豊かな作品群を楽しそうに紹介して下さった重光豊さんも、「天才アートKYOTO」の発足当時から活動しているおひとりです。障がい者の方々や芸術的天才だと気づいたのは、重光さんが支援学校の校長だった時代。「当時、文部科学省の研究事業の一貫で、プロの画家や芸術系大学の専門家を招いて創作の授業を実施したんです。生徒たちは想像を超える素晴らしい作品を生み出してくれましたが、卒業と共に創作活動から離れてしまう人がほとんど。そこで彼らの才能を活かせる新しい道を切り拓こうと、2012年に学校統廃合で空いた小学校にアトリエを開設しました。2021年に移転してから現在までは、平日に制作をしたい人は北区紫野にある「きたアトリエ」、土・日曜に制作をしたい人は三条にある「東山アトリエ」で活動しています。

### 類稀なる個性に心奪われた企業からのオファーも

現在の所属作家は10歳から57歳までの45人。いずれも絵画教室に通う生徒ではなく、ひとりのアーティストです。取材当日、制作中だった大場多知子さんは引きこもり生活20年の後に作家の道へ。独学で今の画風を確立したのだそうです。天才になる可能性は、誰にでもありと重光さんは考えています。「今、大場さんが描き進めているのは、村田製作所から依頼を受けた作品で、社屋に展示される予定です。制作活動が作家に自信を与え、その自信と充足感が人生を変えていきます。人は能力や才能の有無に関わらず、主体性と周りからの理解で成長し、豊かに生きることが出来ます。そして私もまた、その芽が出る瞬間に立ち会えてとても豊かな気持ちになります」。



「天才アートKYOTO」副理事長・重光豊さん。京都市立の総合支援学校に勤務していた時代から、彼らの美術の才能に着目

通い始めて5年ほどだという、アーティストの大場多知子さん。まごをモチーフにずっと見ていたくなる繊細な画風が持ち味



人気作家氷玉みりさんの制作途中の作品。彼女は今、平面から立体へと進化中



アトリエのひとつ。きたアトリエには合計3つのアトリエが用意されている



### 強いこだわりは天才の証



高島晃平「エンペラーペンギン」



天才アートKYOTO (NPO法人 障害者芸術推進機構) 京都市北区紫野西舟岡町2 ふれあい共生館内 <http://tensai-art.kyoto> 2023年4月以降は月曜～金曜(11:00-15:00)に作品や、作家の創作活動を見学可能(※事前の予約要)。グッズや、原画作品も購入可能。

## INTERVIEW

# THE HAND CULTIVATE YOUR MIND

手で心を耕す

「グリーンウッドワーク」という言葉をご存知でしょうか。欧米にルーツを持つ木工のことで、いわば生木で楽しむ木工です。作るのはスプーンやボウル、椅子といった身近な実用品。身のまわりにある素材を使って、自分が使うものを自分で作り出す——これがグリーンウッドワークです。

PHOTO 畑中 勝如 TEXT 清塚 あきこ

### 木は買いにくいもの!?

「木工は乾かした木でするものでは!?」と思われる方も多くはいます。しかし、もともと牛や馬で農耕していた時代は、欧米に限らず日本でも木工は生木からしていました。生木はやわらかく人の手での加工がしやすいんです。機械が発明され、電力が普及することで、木工は乾燥させてからが基本になり、生木を手工具で削る文化は廃れてしまいました。それが1980年ごろから欧米を中心に趣味の木工としてグリーンウッドワークが見直され、広がったのです。こう話すのはグリーンウッドワークの良さを教え広める福畑慎吾さん。大阪・能勢町にあるご自身のカフェをはじめ全国で活動しています。福畑さんがグリーンウッドワークに魅せられたのは1冊の本の挿絵がきっかけでした。「あるグリーンウッドワークの本に、森の中で椅子を作っている写真があったんです。これがしたい!と夢中になりましたね」。自身の父親の影響もあり、幼い頃から自然に親しんでいた福畑さん。父親といっしょにログハウスを建てたこともあるそうです。「住まいの能勢は山なので、周囲に木はいっぱいあるんです。なのに、おかしなもので、ウッドクラフトを始めた学生時代は、市街地のホームセンターまで電車に乗って木を買いに行っていたんですよ。現代人病と言いますか…周囲の環境と暮らしがまったくリンクしていなかったんですね。今は自分のまわりのものが材に見えるようになりました」。



ワークショップでは、基本的な道具の使い方から、本日の使う木材の説明、削り方の説明、アックスワーク、ナイフワークなど様々



自邸の隣に木で見た自然の中の工房を再現



ワークショップ後、よく話題に上がるのが森林問題。目の前のスプーンを遠くの方々が意識の中でつながら瞬間だと福畑さんは言う



福畑 慎吾  
Shingo Fukuhata

UPIグリーンウッドワーク・インストラクター、[cafe soto]オーナー、大阪府出身。酪農学園大学卒。岐阜県立森林文化アカデミーのプロジェクトチームに参加するなど西日本を代表するグリーンウッドワーク指導者

### 手を動かすと、気持ちが前向きに

福畑さんは大学で酪農を学び、食品メーカーに就職します。「好きな仕事に就いたつもりだったけれど、どこか不安定な感覚がありました。何か足りない。木や土に触れたい。そんな気持ちを解消してくれたのが木工だったんです。癒でした。木を手に取り、無心になって削り、1本のスプーンにする…削りながら、もつとなめらかに、もっと握りやすく手を動かす…。翌朝会社へ向かう電車の中で、次はこんなふうにしてみようと考え…。気がつけば自身でカフェを開き、そこでグリーンウッドワークを広めはじめていました。今、福畑さんは自身が営む[cafe soto]や、アウトドアライフを提案するショップ「UPI」などでグリーンウッドワークを教えています。「現代人の暮らしにおいて、自分でものを作ることも自分だけで物事が完結することもほとんどありません。人々は自分でも気づかないうちに自然とのつながりや、ものづくり体験を求めているようです。なぜなら、二足歩行をはじめ、手を自由にした人間にとって自然なことだから」。福畑さんはこうも言います。「私がグリーンウッドワークを広めたいのは、実は疲れを癒すためでも、技術を教えるためでもないんですよ。未来を向いて、次はこうしてみようという前向きな気持ちを保つためなんです。自分の手で何かが生み出せるという自信は、人を強く前向きに、そして人生を豊かにしてくれるのではないかなと思うんです」。



スプーンづくりの基本セット。上から、カルソフ・スモールカーバー(斧)、モーラー・ウッドカービングナイフ、モーラー・フックナイフ。すべてUPIで購入可能。木材も販売している



UPI京都店内でのワークショップ。参加者は、はじめての方からも3回目という方まで、「はまってしまいました。次はキャンプでコーヒ一片に没頭したいです!」



UPI 京都  
☎075-744-1993  
京都市中京区弁慶石町61  
11:00-20:00 無休  
<https://upioutdoor.com>





INTERVIEW

# ALTERNATIVE ENERGY

## 「コミュニティ・バンク」が描く豊かな街

京都市役所の向かい側、河原町御池南東角に[QUESTION (クエスチョン)]というビルがあります。実はこちらは京都信用金庫の河原町支店。耐震補強のために建て直されました。信用金庫なのに、入口にATMも受付カウンターもない!?という風変わった様にも見えるビルの狙いを、立役者のひとり、京都信用金庫の理事長・榊田隆之さんに聞きました。

写真協力 京都信用金庫 PHOTO 森 昭人 TEXT 清塚 あきこ

1Fにあるカフェ&バー/チャレンジスペースでは、頻りにポップアップイベントやマルシェなどが開催されている



4Fのコミュニティステップス/セミナールーム



5Fのスチューデントラボは学生たちのための場所。NPO法人グローバル人材開発センターが運営。榊田理事長も設立当初から主体的に関わっている

8Fのコミュニティキッチン「DAIDOKORO」は100名収容可能な飲食スペースとシェアキッチンがあり、様々なイベントが開催されている



**QUESTION**  
☎075-585-4190  
京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町390-2  
9:00~21:00(平日)  
10:00~18:00(土曜日)  
<https://question.kyoto-shinkin.co.jp>

## つながりが街を耕し、動かしていく

日々の生活の中で「これってどうにかできないだろうか」「これとこれを組み合わせたらどうなるんだろう」…などという“問い”を持ったことはないでしょうか。[QUESTION]にはそんな問いが日々集まってくるといいます。

「1人では解決できないことも、みんなで寄ってたかってその問いについて考えてみる。そんな人と人との有機的なつながりをたくさん作ることで、地域は豊かになっていくのではないか」。理事長・榊田隆之さんをはじめとする京都信用金庫のメンバーたちはそんな仮説を立てて、このビルを作ったそうです。

[QUESTION]は地上8階、地下1階の合計9フロアで構成されていますが、そのうち京都信用金庫が金融業務を行うフロアは6階のみ。その他のフロアはコワーキングスペースやセミナールーム、イベントスペース、コミュニティキッチンなど“人が寄ってたかれる”空間が広がっています。「実はこのビルは私たちが20年以上前から積み重ねてきたビジョンを可視化したものです。この場所でたくさんの人が出会ってつながり、そのつながりで0から1を生み出せたら…、と私たち自身も日々ワクワクしています」。オープンからはや2年。今では持ち込まれた“問い”が毎週のように“集い”へと変わり、大学生から企業人まで様々な人たちが関わるオープンインベションによって、何かの“種”が誕生しています。

## マネーを起点にしてはいけないスタートとゴールは「人と人との心のつながり」

「私たちはコミュニティ・バンクという理念をかかげています。本来、地域のためにあるべき信用金庫は、草の根を支える生活者や企業の皆さんと目線を合わせ、地域を豊かにしていくことを目指すべきです。豊かさとは経済的な豊かさもあることながら、それにも増して、日本のような成熟社会では心の豊かさが重要。そう考えた時、私たちがとった行動は“マネー”からいったん離れることでした。だからバンクフロアは1Fではない」。お金をスタートとゴールにした場合、共感や共助の心が生まれにくいのではないかと。そう考えた京都信用金庫のメンバーは、まず、人と人をつなごうと考えたのです。

[QUESTION]で“問い”を投げかけると、コミュニティマネージャーと言われるスタッフが「じゃあ、あの人が聞いてみましょう」とつないでくれます。良い問いは共感呼び、共感がつながりを呼び、やがてそれはコミュニティに。共感で結ばれたつながりは人の心を豊かにする。そして、それこそが京都信用金庫の夢「心豊かなコミュニティであふれる街づくり」だと、榊田さんは言うのです。

「お金はいらないとは言いません。何かを実現しようとする時、短期間でスケールアップするためにお金は有効です。しかし、お金が起点ではいけない。スタート、そしてゴールは人と人との心のつながりだと思ふのです。このビルができたことで、知らない人に日々出会い、私たちが想像もできないようなテーマで街の人がつながっています。これからも、もっともっと出会いが生まれる場所になっていってくれたらうれしいです。なにしろ、それが昭和46年からコミュニティ・バンクを標榜している私たちの本懐ですから」。

Dialogue for Circular Economy  
YASUDA SANGYO GROUP × 株式会社ワコール

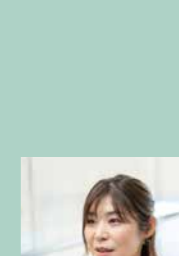
# ON THE WAY TO CIRCULAR ECONOMY

## 企業・文化・商品 大きなくりで巡りあう社会へ

戦後間もなく京都で創業し、日本屈指の総合下着メーカーとなった「ワコール」。実は、文化的価値のある京町家を保存するための宿泊事業「京の温所(おんどころ)」を展開するなど社会的な活動も活発です。業界のトップランナーとして走り続ける「ワコール」の宣伝担当の舛川さんを、サーキュラーエコノミーに関するアイデアの宝庫として、有名経営者からも意見を求められる安田産業グループの安田義崇さんが訪ねました。



安田 義崇 Yoshitaka Yasuda  
安田産業グループ地球環境室室長代理



舛川 康代 Yasuyo Kusakawa  
株式会社ワコール マーケティング統括部 宣伝部



この星に生きるためのブラ「L∞Ping(ルーピング)」

## リサイクルを考えたものづくり

**安田** 1万サイトを数える当社のお取引先でも、環境配慮活動に力を入れておられる企業がすごく増えました。ただ、そのすべての活動が本当の意味でサーキュラーエコノミーに寄与しているのか、疑問もあります。作る工程で廃棄物の量が減った、けれどリサイクルしづらい素材や仕様になったなど、矛盾もあるからです。これからはドイツやベルギーなどリサイクル先進国のように、メーカーが自社の製品をリサイクルする会社を子会社化し、ものづくりの段階からリサイクルの話ができる企業が社会から求められるでしょうね。

**舛川** 当社では2030年に向けた環境目標のひとつに「環境配慮型素材の使用比率を50%」を掲げており、その一環として新商品[L∞Ping(ルーピング)]を2022年にデビューさせました。[L∞Ping]のブラジャーは、製造の過程で工場から出る糸くずからつくられた再生糸を商品の約60%に使用しています。将来的には製造した商品を回収して再資源化し、ブラジャーに生まれ変わらせる完全循環をめざしています。また、デザインや設計のベースとなっているのが、約40年前に発売した商品のパターンを再活用しています。時代のニーズに応えながら、良質な技術や文化を継承していくことも当社におけるサステナブルだと考えています。

**安田** 文化を守ることも、間違いなくサステナブルです。過去や歴史から学ぶ事も多い。僕がちょうど廃棄物処理の業界に入った時期と重なる、15年前から継続されている「ブラリサイクル」のことも気になります。

**舛川** 毎年10月から翌年3月に、「ワコール ブラリサイクル」と題してご不用になったブラジャーを店舗で回収しています。ブラジャーを入れた袋ごとお預かりし、開封することなく連携している「BRING」のリサイクル工場へ。そこで、細かく粉砕されワイヤーなど金属部分を磁石で取り除いた後、生活雑貨等に再利用されています。昨年は総重量25.7トン、ブラジャーに換算すると25万7000枚が集まりました。

## 生まれ変わるのにもストーリーを

**安田** 当社では、1日約130トンの産業廃棄物を受け入れ、その85%をリサイクルしています。リサイクル率も重要ですが、さらに重要になってくるのは、廃棄物の内容の情報開示です。「捨てるマーケティング」と呼んでいるのですが、当社では今、そのためのシステムを開発中です。クライアント企業自身がゴミの内容を把握する事で、削減・リサイクルポイントが見えてきます。また企業が連携し合い、お互いが持つノウハウを活かした時に、抱える課題を一気に解決できるかもしれません。廃棄物を媒介に弊社が接着剤となり、一緒に解決していける存在になりたいと思っています。人も企業も出会ってストーリーが生まれ、腑に落ちるストーリーは共感を生みま

すよね?例えば、さきほどの「ワコールブラリサイクル」で生まれ変わるものが下着に特化した何かだといえますよね。例えばブラジャーがきれいに干せる専用ハンガーとか、面白くないですか!

**舛川** それはいいですね。女性はもちろん、男性でも家族の下着を上手に干せるようになりそうですし、当社の哲学でもあるものを大切にすることに繋がります。昨今、性別も年齢も関係なくサステナブルな社風に興味を抱いてくださる方が多くいらっしゃいますからね。「ワコール」という企業は創始者の塚本幸一が戦争から戻り、生かされた命への感謝から始まった企業です。人にやさしく、ひいては地球にやさしいということは、これからも継続していくべき社風なのだと思います。

**安田** 商品売って終わり、という時代は過ぎ去り、人にも地球にもやさしい企業であることは必然になってきます。ただ単にリサイクル率や削減した量など数字だけを追い求めるのではなく、よりよい未来を感じるゴールビジョンがあれば、人はその活動に共感してくれると思います。

株式会社ワコール  
京都市南区吉祥院中島町29  
<https://www.wacoal.jp/support/>

安田産業グループ  
☎0120-53-1153  
[info@yasuda-group.co.jp](mailto:info@yasuda-group.co.jp) <http://www.yasuda-group.co.jp/>